

# CAMPUS HEALTH

---

2019.3

56 (1)

第56回全国大学保健管理研究集会  
(東京大学) 報告書



Japan University Health Association



# 第56回全国大学保健管理研究集会

The 56th Annual Meeting of Japan University Health Association

## 広がる国際化社会における大学保健管理

### 報告集

**会期** 平成30年(2018年)10月3日(水)～10月4日(木)

**会場** きゅりあん(品川区立総合区民会館)  
東京都品川区東大井5-18-1

**主催** 公益社団法人 全国大学保健管理協会  
国立大学法人 東京大学

**後援** 文部科学省



# 目 次

第56回全国大学保健管理研究集会 ごあいさつ

「広がる国際化社会における大学保健管理」…………… 5

第56回全国大学保健管理研究集会 大会長 小池 和彦

## I. プログラム

プログラム・日程表 …………… 9

II. 開会式…………… 15

## III. 特別講演

1 氾濫する健康に関する情報への対処 松木 則夫 …………… 19

2 外科医から宇宙飛行士、そして宇宙医学研究へ 古川 聡 …………… 23

## IV. 教育講演

1 国際化時代の留学生支援を考えるー 大学としての課題・援助職としての課題 大西 晶子 …………… 27

2 精神栄養学～うつ病を中心に～ 功刀 浩 …………… 30

3 性暴力の予防と被害者支援 河野 美江 …………… 40

## V. シンポジウム

1 LGBTI について知っておくべきこと

① 海外と日本の LGBTI 活動 石丸径一郎 …………… 45

② LGBTI の医療の課題 針間 克己 …………… 49

③ LGBTI をとりまく大学の課題 高野 明 …………… 52

2 大学発 健康情報の標準化とデータを活用した健康管理・健康増進の展望

① 健康情報標準化の提案①

若年層に対してアルコール摂取に関わる問診と教育・啓発を行うことで転帰を改善することが出来るか? 吉原 正治 …………… 54

② 健康標準化の提案②

大学生において、主観的健康感が高い人と低い人を比較してアウトカムの発生に違いが生じるか。 山本 裕之 …………… 55

③ 標準化がもたらす健康データの価値創造 ～ガイドライン作成の立場から～ 清原 康介 …………… 59

④ 健康情報の標準化と PHR (パーソナルヘルスレコード) にかける期待 増原 知宏 …………… 62

ミニシンポジウム 移行期の健康管理に対して大学保健が果たす役割について –先天性心疾患患者を例に–

① 成人先天性心疾患とは 専門管理システムの必要性と意義 赤木 禎治 …………… 64

② 移行期医療を患者の社会生活の助けとするために 落合 亮太 …………… 68

③ 成人期への移行-発達の視点から 榎本 淳子 …………… 72

④ 先天性心疾患患者として、移行期において経験したこと 村田 俊樹 …………… 75

## VI. 一般研究発表

優秀演題表彰 …………… 81

一般研究発表 …………… 83

Ⅶ. 展示ブースコーナー

賛助会員交流コーナー / 企業展示コーナー ..... 417

Ⅷ. 閉会式 ..... 421

Ⅸ. 名簿

第56回全国大学保健管理研究集会 参加者・研究発表者等名簿 ..... 425

第56回全国大学保健管理研究集会 運営委員会委員・幹事名簿 ..... 432

## ごあいさつ

### 広がる国際化社会における大学保健管理

第 56 回となる全国大学保健管理研究集会が平成 30 年 10 月 3 日（水）・4 日（木）の 2 日間、きゅりあん（品川区立総合区民会館）にて開催されました。開催直前には、台風 24 号が発生し、危ぶまれる中での開催となりましたが、大きな混乱もなく 800 名の多くの方々にご参加いただきました。

この度、報告書を刊行するに当たり、研究集会にご参加いただいた多くの会員の皆様、ご多忙を押しご登壇いただきました講師や座長の先生方、そして様々なご支援・ご協力をいただきました関東甲信越地区大学の運営委員会委員の皆様へ深くお礼を申し上げます。

東京大学が研究集会を担当させていただくのは、2002 年の第 40 回大会以来で、第 56 回大会は 16 年ぶりとなります。この 16 年間で大学における保健管理業務は学生や教職員の心身の健康の維持や増進を図ることを基本としつつも国際化や多様性の拡大により業務の範囲も大きく広がってきました。

さて、今回の大会テーマは「広がる国際化社会における大学保健管理」といたしました。1980 年代にはすでに留学生受け入れ目標 10 万人など、大学の国際化は盛んに議論されており、一見、目新しいテーマではないように思われたかもしれませんが、しかし、今日、グローバル化の波は大学にも押し寄せ、国境をまたいだ交流、そして競争に晒されています。交通機関の発達だけではなく、高度な情報化はますます地球を小さくし、お互いの距離を縮めています。

活発になったこの「国際化」は、国籍などの単なる制度上の問題ではなく、様々な文化のぶつかり合い、多様性の急激な拡大をもたらしています。共通言語で議論する専門分野の教育研究活動より、むしろ、日常生活における関わり合いや日々の健康上の問題でこそ、一人一人の多様性が顕在化します。大学における本来の目的である教育研究活動を充実したものとするためには、保健管理部門の役割は非常に大きなものと思っております。

本研究集会でもこうしたことを念頭に 2 つの特別講演、3 つの教育講演、3 つのシンポジウムを企画いたしました。

特別講演 1 で、運営委員会副委員長の松木則夫理事より「氾濫する健康に関する情報への対応」というテーマで我々にとって一番大切と思われる健康に関し、健康食品の話などをまじえ、専門的にお話をいただき、特別講演 2 では、「外科医から宇宙飛行士、そして宇宙医学研究へ」というテーマで宇宙航空研究開発機構の古川聡先生から宇宙環境を利用した実験を通して得られる知見は、宇宙でヒトの健康を保つのみならず、地上の健康長寿に役立つものであるという、普段、なかなか聞けない貴重なお話をいただきました。

本研究集会のテーマに沿った教育講演として、本学グローバルキャンパス推進本部の大西准教授から「国際化時代の留学生支援を考えるー大学としての課題・援助職としての課題」についてお話をいただきました。

シンポジウム 1 では、「LGBTI について知っておくべくこと」を企画し、性別や性指向の多様性を取り扱い、シンポジウム 2 「大学発 健康情報の標準化とデータを活用した健康管理・健康増進の展望」では大学における標準的な健診項目の提唱及び健康情報の標準化がもたらす健康増進・健康管理の発展について活発なディスカッションが行われました。また、ミニシンポジウムでは「移行期の健康管理に対して大学保健が果たす役割についてー先天性心疾患患者を例にー」では、移行期医療の分野の第一線で活躍されている先生方と患者さんを代表して本学の卒業生をお招きし、移行期における大学保健のサポートに関してディスカッションが行われました。

一般研究発表は 8 つのカテゴリーに 131 題もの応募をいただき、ポスターディスカッション会場では多くの興味深い演題が報告され、参加者間で活発な討論をしていただきました。どの発表が扱う課題も、現在の大学等において非常に重要なものであるということが感じられました。

最後になりましたが、開催にあたりご支援・ご協力をいただきました多くの皆様に心からお礼を申し上げ、公益社団法人 全国大学保健管理協会の益々の発展を祈念して、本報告書発刊のご挨拶とさせていただきます。

第 56 回全国大学保健管理研究集会

大会長 小池 和彦